

平成30年 5月31日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13127

研究課題名（和文）紛争の海からコモンズの海へ：基礎研究と臨床研究との相渉

研究課題名（英文）From the Sea of Conflict to the Sea of Commons

研究代表者

早瀬 晋三（Hayase, Shinzo）

早稲田大学・国際学院（アジア太平洋研究科）・教授

研究者番号：20183915

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2018年度からの本格的研究の準備として5つの班（総括、ヨーロッパ海、インド洋、海域東南アジア、日本周辺海域）を設け、それぞれ歴史と文化、社会を念頭に、紛争の基層的原因を考えるとともに、これまでどのようにして紛争を解決してきたのか、あるいは紛争を回避してきたのか、その知を探ることを目的とした。それぞれの班で、本研究の全体像の理解を深めるとともに、ほかの班との連携について意見交換し、本格的な研究のための申請をおこなう準備を順調に進めることができた。代表者の早瀬は、「WASEDA ONLINE」で「紛争の海からコモンズの海へ」と題して、日本語と英語で「オピニオン」を発信した。

研究成果の概要（英文）：This research project was divided into five groups (Headquarters, European Seas, Indian Ocean, Maritime Southeast Asia, and Seas around Japan) to prepare for full-scale research from April 2018 based on history, culture and society. It aims to explore how to solve and/or avoid the conflicts in the past. Each group deepened the understanding of the overall picture of this research project and exchanged opinions with other groups. Hayase wrote for "WASEDA ONLINE" entitled "From the Sea of Conflict to the Sea of Commons" in Japanese and in English and concluded in this essay as follows: "If they allocate their military budget for disputes to a budget for protecting the environment and natural resources instead, their people will be able to enjoy the blessings of the sea and live better lives. If we can demonstrate academically how to effectively improve the sea and transform it from the conflict into the commons, academics can contribute to the settlement of these disputes."

研究分野：History

キーワード：海域 コモンズ 紛争 海域東南アジア インド洋 ヨーロッパ海域 日本周辺海域

1. 研究開始当初の背景

代表者の早瀬晋三は歴史民族学を専門とし、文献資料の乏しい民族の歴史と文化の理解に努めてきた。また、日中・日韓歴史問題が、尖閣諸島、竹島、さらに南シナ海の領有権問題にまで発展したことを踏まえ、臨床の知としての歴史学から和解の途を探る研究に取り組んでいる。分担者のひとり、秋道智彌は生態人類学を専門とし、グローバル化した世界に対応するコモンズ論を求めてきた。ともに、海域東南アジアなどでのフィールドワークを通して、現在起こっている紛争を実際に目撃するとともに、歴史と文化のなかに紛争を解決するコモンズの思想をみてきた。早瀬には『海域イスラーム社会の歴史』(岩波書店)や『歴史空間としての海域を歩く』(法政大学出版局)などの著書がある。秋道には『コモンズの地球史』(岩波書店)や『海に生きる - 海人の民族学』(東京大学出版会)などの著書があり、日本学術振興会による異分野融合による方法的革新をめざした人文・社会科学研究推進事業における共同研究「日本の環境思想と地球環境問題 - 人文知からの未来への提言」の代表を務め、現代日本の取り組むべき大きな課題としてのコモンズの思想を考察した。しかし、これらの基礎研究の成果を近年問題となっているマラッカ海峡やソマリア沖の海賊行為や中華人民共和国の海洋侵出にともなう領有権問題、漁業など海洋資源、海洋汚染などの環境問題の解決にどのように役立てることができるか、その具体的方途について、まだ十分に提言できていないとはいえない。

2. 研究の目的

近年、日本周辺海域で、無人島や岩、干潮時にしか目視できない「低潮高地」などをめぐる領有権争いが問題になっている。海洋をめぐっては、これまで「共有性(コモンズ)」と「排他性」、「人間中心主義」と「国家中心主義」の相対する主張のなかで、紛争が処理されてきた。だが、今日、「国家中心主義」と「排他性」が前面に出て、紛争の糸口が見えなくなっている。本研究では、陸域による海域支配の困難さから、海を共有物と考えるコモンズの思想が古今東西で発達してきたことに注目し、現在海域で起こっている紛争を、歴史学、社会学、人類学などの基礎研究から問い、その解決の糸口を見出そうとするものである。なお、資源の枯渇など「コモンズの悲劇」が起こらないよう、現代の状況を踏まえた「グローバル・コモンズ」も追求する。本研究によって基礎研究を紛争解決のための臨床研究に結びつける、極めて挑戦的な方途を探る。

本研究は、2018年度からの本格的研究の準備として5つの班(総括、ヨーロッパ海域、

インド洋、海域東南アジア、日本周辺海域)を設け、それぞれ歴史と文化、社会を念頭に、紛争の基層的原因を考えるとともに、これまでどのようにして紛争を解決してきたのか、あるいは紛争を回避してきたのか、その知を探ることを目的とした。

3. 研究の方法

総括班は、まず近年起こっている海域での紛争(尖閣諸島・竹島領有権問題、南沙諸島・西沙諸島領有権問題、海産物資源、マラッカ海峡・ソマリア沖海賊、福島原発海洋汚染など)の実態を把握し、4つの海域研究と結び付ける役割を担う。4つの海域研究は、総括班が提起する問題点を念頭に、これまでおこなわれた文献調査とフィールドワークの両面のそれぞれの利点を理解し、4つの海域研究の連携によって両面の垣根を取り除く研究をおこなった。

4. 研究成果

(1) 2016年度

総括班は2016年5月28日に早稲田大学で第1回研究会を開催し、本研究の目的を確認し、キーワードである「コモンズ」について共通の認識をもった。また、各班の活動計画を報告し、共通に議論できることについて検討した。11月12日に京都大学で第2回研究会を開催し、総括班の分担者による3つの報告(「海のコモンズ論 - 人類学の視座」、「ペルシア湾の真珠採りと海賊と石油」、「アホウドリと日本人の太平洋進出」)を手掛かりとして、今後の本格的な研究について、意見交換をおこなった。

ヨーロッパ海域、インド洋、海域東南アジアの3つの班は、それぞれ1~2回の研究会を開催し、それぞれの班の研究計画、ほかの班との連携について議論し、理解を深めた。また、数人の班員は11月12日の総括班の第2回研究会に出席し、本研究の全体像を理解するとともにほかの班との連携について意見交換した。

日本周辺海域班については、現在領土問題に発展している尖閣諸島周辺海域および南シナ海で戦前から日本漁民などが活動しており、とくに台湾漁民とは戦後も共同で漁業に従事していたこともあることから、その歴史的過程や現状について沖縄県立図書館等で調査した。また、南シナ海においては、フィリピン人やベトナム人などの零細漁民が現在でも協力して漁業に従事していることから、その情報の収集をはじめた。

予算の関係から総括班2回、各班1~2回の研究会をもつことしかできなかったため、関連学会や研究会でメンバーが参加する機会を捉えて、意見交換をおこなった。2017年秋に本格的な研究のための申請をおこなう準備を

順調に進めることができた。また、2018年度からは始める予定の本格的な共同研究で、十分な活動資金が得られない場合を考え、それぞれの班でその対策を考えはじめた。班員の研究意識もたかまった。分担者の研究活動も、それぞれ順調に書籍、論文、内外の学会での報告などをおこなった。これまでの研究成果をいかして、共同研究に臨む準備を着実に進めた。

はじめ日本の海域研究のデータベースを作成することを計画したが、日本だけでなく、海外の研究者の関心も高いことから、尖閣諸島周辺海域および南シナ海での漁民の活動に注目することにした。漁民は大船団を組んで商業的漁業をおこなっているものではなく、家族の生活のために零細漁業に従事しているフィリピン人、ベトナム人、台湾人で、その基礎資料を収集しはじめた。中国と韓国、中国とインドネシア、ベトナムとインドネシアなど、黄海、東シナ海、南シナ海と広範囲にわたって漁業関連の問題が起きており、広い視野での考察ができるよう取り組みはじめた。

なお、代表者の早瀬が、2016年10月に「WASEDA ONLINE」で「紛争の海からコモンズの海へ」と題して、日本語と英語で「オピニオン」を発信した。フィリピン、アメリカ、ブラジルの研究者、大学院生などからの問い合わせがあり、今後連絡を取りあって準備を進めることにした。

(2) 2017年度

総括班は2017年7月22日に研究会を開催し、分担者の2つの報告と各班の議論の内容と進捗状況を確認した。その後、7月22日、26日、8月3日、14日に科研Aへの申請に向けて打ち合わせをおこなった。ヨーロッパ班では、「ヨーロッパ世界における広義の海の諸制度の内と外」を共通テーマとして練り上げ、それに基づき、それぞれで研究を遂行した。その成果の一端は、2017年9月30日(土)に京都大学文学部にて開催した研究会で共有した。インド洋班では、2017年6月3日、11月19日、18年1月21日の3回研究会を開催した。いずれの研究会でも、M.ピアスンによるインド洋通史を講読し、同時に班員の研究発表をおこなった。第2回研究会では、長年モザンビークを中心に東アフリカ研究をおこなってきたエドワード・A・オルパース氏(UCLA名誉教授)を迎えて、モザンビークの解放奴隷登録書の史的価値や今後の研究の可能性について議論をおこなった。東南アジア班では、在ジャカルタ京都大学連絡事務所でインドネシアの海民研究に焦点をおいた研究会を、シンガポール国立大学アジア研究所で島嶼部東南アジアの境域社会の文化変容に関する研究会を開催し、海外の研究者と連携をはかっ

た。それぞれの班で、本研究の全体像を理解するとともに、ほかの班との連携について意見交換し、本格的な研究のための申請をおこなう準備を順調に進めることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

早瀬晋三 "Manila Hemp in World, Regional, National, and Local History"『アジア太平洋討究』、査読無、第31号、2018、171-88

早瀬晋三 「日本占領・勢力下の東南アジアで発行された新聞」『アジア太平洋討究』、査読無、第27号、2016、61-100

早瀬晋三 「ラブアン - すれ違うメモリアル」『アジア太平洋討究』、査読無、第27号、2016、101-16

秋道智彌 「海洋資源へのアクセス権とコモンズ論 - 海洋保護区に注目して - 」『日本海洋政策学会誌』、査読有、2017、7巻、4-22

金澤周作 "To vote or not to vote: Charity voting and the other side of subscriber democracy in Victorian England", *English Historical Review*, 査読有、Vol. CXXXI, No. 549, 2016, 353-383

中里成章 "Writing about the Partition Riots of India", *Romanian Journal of Indian Studies*, 査読無、1, 2017, 9-24

中里成章 「パル意見書 - その思想的・政治的背景」『年報日本現代史』、査読無、21、2016、1-32

保坂修司 「サウジアラビアの構造改革について (特集 原油安と中東ジオエコノミクスの波動)」『世界経済評論』、査読無、60-5、2016、65-74

保坂修司 「アルカイダからイスラーム国へ - ジハード主義の来し方行く末 (特集: 9・11から15年: 世界はどう変わったか)」『世界』、査読無、887、2016、79-87

〔学会発表〕(計 17 件)

早瀬晋三 ""The Greater East Asia Co-Prosperity Sphere" Depicted in Secretly Kept Photos of the Asahi Newspaper," International Conference on the 75th Anniversary of World War II in the Philippines, 17-19 August 2017, Holy Angel University, Angeles City, Philippines

早瀬晋三 "The Yasukuni Shrine Controversy in the Perspective of Southeast Asia: A Hidden "Dispute", SEASIA 2017 Conference, Unity in Diversity: Transgressive Southeast Asia, 16-17

December 2017, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

秋道智彌「地球時代の食 - 地域の知を世界へ - 」鶴岡致道大学講演会「食といのち」第6回講演会、2017年11月18日、グランド エル・サン、招待講演

秋道智彌「日本海ののぞき窓 - 日本海の保全と活用 - 」日本海学推進機構シンポジウム「いま日本海で起こっていること」パネルディスカッション、2018年2月17日、北日本新聞ホール

秋道智彌「変容するコモنز - 牧畑とサンゴ礁の事例から」、済州大学コモنز論シンポジウム「東アジアのコモنز：可能性から現実へ」2017年2月16日、済州大学

平岡 昭利「アホウドリと日本人の太平洋進出」、日本建設業連合会、海洋開発技術講演会、2018年3月13日、如水会館

金澤周作「新視角 トランスナショナル・フィランソロピー」、第21回進化経済学会京都大会2016年次大会、2017年3月26日、京都大学

金澤周作「ロビンソン・クルーソーたちの帰還 17~19世紀における難船者の運命」、日本ジョンソン協会第50回大会、2017年7月1日、ホテル東京ガーデンパレス、招待講演

新井和広 "Saint veneration in Indonesia and the emergence of Hadrami sada: shaping historical perception by using the current situation?" at International Symposium, "Islamic Studies and the Study of Sufism in Academia: Rethinking Methodologies," The Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, May 21, 2017

新井和広「アラビア半島 インドネシア間の聖者を通じた関係の現在 - 2014~15年の聖者祭とマウリド月の観察から」、スーフィー・聖者信仰研究会、2016年7月9日、上智大学

新井和広「インドネシアとアラビア半島を結ぶ預言者一族の活動 聖者の『プロモーション』を通じて」、シンポジウム「協調と融和のイスラーム 日本・中国・インドネシアの事例から」、2016年11月19日、上智大学

長津一史 "Maritime Movements and Ethnic Reformation of the Bajau in Indonesian Maritime World," International Science Conference of Sea Gypsy, 2017年5月8日, M-Regency Hotel, Makassar, Indonesia 招待講演

長津一史 "Maritime Movements and Ethic Reformation of the Bajau in Indonesian Maritime World." *International Science Conference on Bajo Society*. 2017年5月8日, Makassar: M-Regency Hotel, 招待講演

長津一史 "Islamization Compared: Processes of Becoming 'Pious Bajau' in

Malaysia and Indonesia," *Asian Research Institute Cluster Seminar: Religionization at Margins in Insular Southeast Asia: Introducing Recent Southeast Asian Studies in Japan*. 2018年3月20日, Singapore: Asian Research Institute, National University of Singapore

長津一史「東南アジア海民論と二つの比較 地域研究的越境の試みとして」、第95回東南アジア学会研究大会(大阪大学)パネル「東南アジア海民論と二つの比較 地域研究的越境の試みとして」(組織者:加藤剛)、2016年5月、大阪大学

長津一史 "Bajau as Maritime Creoles: Dynamic of the Ethnogenesis in Southeast Asian Maritime World," in Panel "Problematizing Inequality and Inclusiveness of the 'Masyarakat Adat': The Power-knowledge Nexus," (Panel Organizer: Herry Yogaswara, Riwanto Tirtosudarmo & Fadjar I. Thufail). The 6th International Symposium of Jurnal Antropologi Indonesia. 2016年7月, Depok: University of Indonesia.

中里成章「パル意見書とインド政府」東京裁判と世界平和国際学術论坛(東京裁判と世界平和国際学術フォーラム)2016年11月11-13日、上海、上海交通大学

〔図書〕(計 21 件)

早瀬晋三『グローバル化する靖国問題 - 東南アジアからの問い』、岩波現代全書、2018、224+22

早瀬晋三編『南洋協会発行雑誌(『会報』・『南洋協会々報』・『南洋協会雑誌』・『南洋』1915~44年) 解説・総目録・索引(執筆者・人名・地名・事項)』龍溪書舎、2018、全2巻(356+321)

早瀬晋三「東南アジアからみた靖国神社 - 表面化させない「紛争」」橋本伸也編『紛争化させられる過去 - アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化 - 』、岩波書店、2018、193-216

早瀬晋三・白石昌也編『朝日新聞大阪本社所蔵「富士倉庫資料」(写真)東南アジア関係一覧』、早稲田大学アジア太平洋研究センター、2017、422

秋道智彌『魚と人の文明論』、臨川書店、2017、322

秋道智彌『食の冒険 フィールドから探る』、昭和堂、2018、293

秋道智彌編『交錯する世界 自然と文化の脱構築 フィリップ・デスコラとの対話』、京都大学学術出版会、2018、395

秋道智彌「海のエスノ・ネットワーク論と海民 異文化交流の担い手は誰か」小野林太郎・長津一史・印東道子編『海

民の移動誌 西太平洋のネットワーク社会』、昭和堂、2018、38-65

秋道智彌・赤坂憲雄「対談「コモンズ＝入会」の可能性を探る」秋道智彌・赤坂憲雄編『人間の営みを探る』（フィールド科学への入口）玉川大学出版会、2016、5-64

秋道智彌『越境するコモンズ - 資源共有の思想をまなぶ』、臨川書店、2016、554
秋道智彌『サンゴ礁に生きる海人 琉球の海の生態民族学』、榕樹書林、2016、368

平岡昭利 *Japanese Advance into the Pacific Ocean – The Albatross and the Great Bird Rush*, Springer, 2017, 165

平岡昭利編『読みたくなる「地図」 - 東日本編』、海青社、2017、134

平岡昭利編『読みたくなる「地図」 - 西日本編』、海青社、2017、128

金澤周作「難破譚の中の船乗り 近世ヨーロッパの船とサバイバルの条件」田中きく代・阿河雄二郎・金澤周作編『海のリテラシー 北大西洋海域と「海民」の世界史』、創元社、2016、16-41

小野林太郎・長津一史・印東道子（編著）『海民の移動誌 西太平洋の海域文化史』、京都：昭和堂、2018、394

甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子（編）『小さな民のグローバル学 共生の思想と実践をもとめて』、東京：上智大学出版会、2016、390

中里成章 *Neonationalist Mythology in Postwar Japan: Pal's Dissenting Judgment at the Tokyo War Crimes Tribunal*. Lanham, MD: Lexington Books, 2016, 302

保坂修司『ジハード主義 - アルカイダからイスラーム国へ』岩波現代全書、2017、234

鈴木恵美「アラブの春後のエジプトにおける混乱と平和構築 - チュニジアとの比較から」東大作編『人間の安全保障と平和構築』、日本評論社、2017、71-91

- ⑳ 鈴木恵美「エジプトにおける急進派の連携と分裂 「IS シナイ州」とアル・カイダの競合関係の考察」山内昌之編『中東と IS の地政学』、朝日選書、2017、147-166

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早瀬晋三 (HAYASE, Shinzo)

早稲田大学・大学院アジア太平洋研究科・教授

研究者番号： 20183915

(2) 研究分担者

秋道智彌 (AKIMICHI, Tomoya)

総合地球環境学研究所・研究部・名誉教授

研究者番号： 60113429

平岡昭利 (HIRAOKA, Akitoshi)

久留米大学・文学部・研究員

研究者番号： 90106013

金澤周作 (KANAZAWA, Shusaku)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号： 70337757

新井和広 (ARAI, Kazuhiro)

慶應義塾大学・商学部 (日吉)・教授

研究者番号： 60397007

長津一史 (NAGATSU, Kazufuki)

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号： 20324676

(3) 連携研究者

中里成章 (NAKAZATO, Nariaki)

東京大学・東洋文化研究所・名誉教授

研究者番号： 30114581

保坂修司 (HOSAKA, Shuji)

早稲田大学・総合研究機構・客員上級研究員

研究者番号： 80421220

鈴木恵美 (SUZUKI, Emi)

早稲田大学・地域・地域間研究機構・研究員

研究者番号： 00535437

(4) 研究協力者

なし ()